

施設の有効活用をすすめています

町には、旧小泊幼稚園や旧給食センターなどの廃止した施設や、津軽中里駅に隣接する元スーパーの店舗など、有効活用が見込まれる建物がいくつかあります。漁火センターを小泊支所に改築したように、町では限られた財源の中で、既存の施設を有効活用することを目的として、改修計画をすすめています。現在、これらの改修事業を、政府の緊急経済対策や合併支援特例交付金など、有利な財源を活用して整備しようとしています。この中から、現在行われている代表的な4つの事業について、ご紹介します。

消防署を移転して活用

旧小泊幼稚園の改修

旧小泊幼稚園は平成21年3月末、少子化の進展による児童数

の減少などを理由に、維持管理経費を削減するためやむなく廃



止し、児童の受け入れは小泊保育所に一本化しました。しかし、建物自体が平成10年に建築されており、比較的新しい建物であることから、別の施設への転用が模索されてきました。一部には、図書館への転用という

企業誘致で町の雇用を創出

旧給食センターの改修

旧給食センターは昭和43年建築された施設で、中里地域の学校給食を供給する施設として長い間使用されてきました。

しかし、中里・小泊両地域とも給食施設の老朽化が進んでいたことなどから、施設の新設が

急務となっていました。このため、町では今年の5月に新給食センターを新築・稼働させています。

新しい給食センターは、徹底した衛生管理を行う完全ドライシステムで運用され、安心安全

意見もありましたが、消防署の新築には3億円以上の費用が見込まれ、町の厳しい財政事情では支出が非常に困難であることや、当町の人口規模などの要因を考慮すると、2つの図書館を運営することは維持管理費用の面で大変厳しいということにな

な給食を町内の小中学生に提供しています。

新給食センターのスタートに伴い、旧給食センターが残りましたが、この給食センターを借りて事業を行いたいという会社が現れました。町としても現下の厳しい雇用情勢から、当町の雇用創出のため、町への事業所の進出を支援し、地域の皆様の雇用につなげたいと考えました。このよう

なことから、旧給食センターの改修を計画しました。

現在、旧給食センターの使用を申し入れている事業者は、外ヶ浜町の(株)北福海産という会社です。主に海

り、小泊消防署への改修・転用が妥当であると判断しました。

★活用する財源：合併支援特例交付金(県交付金)

★総事業費：約5千8百万円

産物の加工・販売を手がけ、当町の旧給食センターでは、ホタテを加工する作業を行います。

★活用する財源：政府の経済対策(平成20年度第1次補正)

★総事業費：約1千7百万円



高齢化社会に対応した グループホームへの転用

小泊診療所の改修

小泊診療所は、平成9年に建てられた比較的新しい建物で、公立金木病院などの近隣医療施設が非常に遠いことから、小泊地域の医療を一手に担う重要な存在となっています。

現在の小泊診療所は、平成16年に経費等の観点から、2階の入院病床を廃止しておりますが、今回はその空いている入院病棟を、老人の皆様のための「グル



ープホーム」へ衣替えしようとしています。

入居する人たちにとって、福祉センターや病院がすぐ下というの大きな安心にもつながることから、今回の小泊診療所の改修は、このようなことにも配慮して行うものです。

小泊診療所のグループホーム

運営開始は、来年度を予定しています。

★活用する財源：政府の経済危機対策(平成21年度第1次補正)
★総事業費：約3千5百万円

グループホームとは？

病気などのハンディキャップを抱える人たちが生活を営む施設で、一般のアパートなどと決定的に違うのは、介助を行う専門の職員が配置されていることです。

「グループホーム」の制度・概念はヨーロッパで始まったものですが、日本では2000年に開始された「介護保険制度」に基づく認知症高齢者型グループホームをいいます。

なお、グループホームに入居するためには要介護認定が必要です。(一番症状が軽い認定の「要支援1」は入居できません。)

「金多豆蔵」上演の場として

津軽中里駅の改修

津軽鉄道「津軽中里駅」に隣接する店舗は、スーパ撤去後借り手がなく、現在空き店舗となっています。この空き店舗を

活用し、今年5月に町の無形民俗文化財に指定された「金多豆蔵人形劇」を上演する場所として改修します。

津軽鉄道は、以前は通勤・買い物としての利用が盛んでしたが、自動車の普及など社会環境の変化により、昭和49年の約256万6千人の利用をピー

クに乗客数が減少の一途をたどり、現在は観光鉄道の側面を強く打ち出しています。

津軽鉄道を観光で利用するお客様は、太宰など有力な観光資源がある金木駅での下車が多く、なかなか津軽中里駅まで足を伸ばしてくる方が少ないようですが、「金多豆蔵人形劇」の上演によって、中里地域への観光客入り込み増加を図る起爆剤となることが期待されます。

また、町文化財審議会でも、

金多豆蔵人形劇一座

明治40年から続く津軽伝統の人形劇で、「金多」と「豆蔵」が主要人物となり、社会の風刺なども取り入れながら、全編津軽弁で行うのが特徴です。

一座を保持している木村巖氏(竹田地区在住)は、平成6年に3代目の襲名を許され、現在に至るまで同氏が主宰しています。

今年4月、町文化財審議会から「民俗芸能として稀少な存在であり、指定について問題はない。」との答申を受け、町教育委員会が5月18日付けで、正式に町の無形民俗文化財として指定しました。

文化財の指定にあたり、「公演機会の創出に努めるとともに、詳細な記録保存の実施が望ましい。」と意見があつたことから、文化財の保存・育成という観点からも、今回の改修が計画され

る理由となりました。

★活用する財源：政府の経済危機対策(平成21年度第1次補正)
★総事業費：約250万円

